

食料自給と日帝撃滅

大道寺よりGさんへ

80年12月15日付

こんにちは、Gさん。Gさんが下獄してからはじめての手紙です。元気ですか？

刑務所当局は、Gさんが獄中者組合に参加していたこと、そしてほかとともに東拘所長を相手どって民事訴訟・行政訴訟を起こしたことへの報復として、仲間たちとの交流を妨害し、「厳正独居」を強制しているのではないのでしょうか？ いろいろと弾圧が繰り返されるかもしれませんが、負けることなく頑張っと思っています。

東拘当局の不当な手紙抜き取りに対する共同訴訟についての連絡。

東拘はまだ反論書を出していないのですが、私が「抜き取った手紙を返還せよ」と要求して所長面接を出したことに對する回答では、Gさんが私に宛てて発信する段階で

抜きとつたのであつて、私に届いた段階で抜きとつたのではない、だから返還せよといわれても返還すべき物はない、というようなトボケタことを言っています。ですから、反論書も、このようなトボケタことを書いてくるかもしれません。

この手紙抜き取りは、Gさんが八月三十一日未明に未決獄中者が変死したことを知らせようとしてくれたことを発端としている訳ですが、その後一月二四日にもまた未決獄中者が変死したようなのです。舎房も以前の人と近いようですから、東拘における医療体制の劣悪さとともに、その舎房担当の看守たちの日常的な弾圧のひどさを物語るものだといえます。

この共同訴訟の相原告であるT画伯も、東拘の劣悪医療体制と、私たちを人間として扱わない弾圧体制の中で苦しんでいます。彼は、椎間板ヘルニア腰痛症と胃潰瘍

で起き上がれず、食事もとれない状態なのですが、東拘は診察を拒否したり、横臥を禁止するという弾圧を行なっています。そして、すでに6回も面会を妨害しています（彼が、腰が痛くて歩けないので車椅子を要求すると、一方的に「面会拒否」をされたり、はって行けと愚弄され、実際にはついでいこうとすると暴行されたりしているそうです）。これは、私たちの共同訴訟に対する報復、とりわけ、訴訟の中心的役割を担っているT画伯への報復以外の何物でもありません。

東拘のT画伯への弾圧に対して、獄中獄外から東拘を糾弾・抗議していますし、また、彼の弁護士が中心になって獄外への奪還、治療を追求しています。

食糧自給と日帝撃滅

さて、六月二三日付の手紙（『中核とは何か』——獄中兵士書簡集1「共にひとつの闘いを」に所収）にアイマイな部分がありましたので、訂正し、補足して説明していきたいと思います。

それは、（日帝の）食料は、農業を中心とする政策がとられるならば自給できるのですが（16ページ下段という部分です）。

日帝の食料の自給は、現在のようない「近代食」とか言われている畜肉・卵・乳製品にかたよった食事を維持、あるいはさらに増大しようとする限り、たとえ農業を中心とする政策がとられても、自給することは不可能です。しかし、穀類・野菜・豆類・いもを中心とする食事に変えるならば、自給することは十分に可能です。ですから、前の手紙で私が、「自給は可能」と書いたのは、この後者の意味であると受け止めて欲しいと思います。

一九七五年の時点での日帝の食料自給率は、総合（つまり、穀物・野菜・肉・果物などの全体）で七四％と発表されています。これは「立派」な自給率ですが、しかし、これは数字のカラクリ・ウソであつて、実際は三〇％以下になるのです。なぜなら、この総合で七四％という自給率には、牛肉八〇％、豚肉八四％、乳製品八二％、鶏卵九七％という自給率を含んでいることなのですが、日帝では家畜の飼料とするとうもろこし・雑穀・麦類・大豆などは自給できず、ほとんど輸入にたよっているからです。したがって、じつさいは、畜産物はほとんど自給できないといえるからです。

では、主食となる穀物はどうかというと、米だけは一〇〇％以上の自給率ですが、小麦はわずか四％。大麦は

一〇％。豆類は全体で九％、うち大豆は四％で、穀物全体の自給率は四三％です。これは、世界的に最低の水準です。

農産物ではありませんが、魚介類の自給についてみてみます。魚介類は、消費量の九九％が「国内産」となっているのですが、その半分近くは近海の漁獲ではなく遠洋（つまり、他の国々の近海）での日本漁船による漁獲です。したがって、現在消費されている魚介類を近海だけから漁獲することはできないのですから、自給はできていないと言わねばなりません。現在消費されている魚介類は、すし種となるような、いわゆる「高級」品が多いのですが、このことは近海では自給をまかなうに足るだけの量を漁獲できないということなのでしょう。決してそうではありません。イワシやサバなどは十分な量が近海で漁獲されているのですが、それが全部そのままの形で私たちの口には入らず、その大半が工場的に養殖されているハマチやウナギなどの飼料として、また、豚や鶏の飼料として消費され、また「高級」魚介類の輸入分だけ輸出されているのです。このことは、商社や水産関係企業などが儲けを拡大しようとして「高級」魚介類中心の操業・販売を行ってきたこと、そしてそれと結び

つく形で「高級」魚介類・畜産物を中心とする「近代食」の普及がはかられたこと、また、日帝本国人が総体として「先進国」文明人としての「豊かさの見栄」をもち、近海ものの安価な魚介類を食べなくなったということを示しています。ですから、私たちが、商社や水産関係企業の利潤追求に荷担せず、また他国の近海（遠洋）からの略奪的漁業や工場的養殖漁業に反対して、近海ものの魚介類を食べるようにするならば、自給は十分に可能なのです。しかし、現状のままならば、自給はできないし、二百カイリ時代に入り、従来と同じような他国の近海での直接的な漁獲はできなくなりつつありますから、「高級」魚介類の輸入が増えることが予想されるので、ますます自給率は低下していくでしょう。

このように、現状の日帝の食料の自給率はきわめて低く、これまでのように「近代食」信仰を続け、政府・企業などのウソにだまされて、畜肉・卵・乳製品・「高級」魚介類を食べ続けるならば、食糧を自給することは不可能であると言わざるを得ないと思います。

なお、先程、米の自給率は一〇〇％以上と書きましたが、これは石油漬けの工場的な農業による結果であることを忘れてはならないと思います。野菜の自給率九九％、

果物八四％も、同じことが言えます。

現在の農業は、農業本来の自然の生態系に即した、生きた土と水と太陽によって作物を生産する農業ではなくて、輸入にたよる石油を前提にした、つまり、石油製品と石油エネルギーによって作物を生産する農業、いわば田や畑を工場とみなす工業生産の方法による、「土ばなれ農業」です。農薬・化学肥料・農業機械のエネルギー源、ビニールなど、すべて石油と切り離せないものを前提とした農業になっているのです。これは、石油資本・製薬資本が、政府・農協と一体となって、利潤の追求のために生み出した農業技術＝死の農法であるということです。

このような石油漬けの死の農法で農民は、増産のためにいつて化学肥料を多用し、その結果、病虫害に弱い稲や野菜などができる、今度は農薬を使い、自分の体をむしばみ、農地を疲弊させ、それはかりか、農薬や化学肥料が農業用水路から流れ出て川や海を汚し、生態系を破壊してきました。したがって、石油漬けの死の農法は、決して真の増産にはならないことを知るべきなのです。私たちは、石油にたよる死の農法ではなく、自然の生態系に即した本来の農業によってその土地と季節にあ

った作物をこそ生産していくべきなのです。このことを、農作物の自給に関つてあらかじめ確認しておきたいと思っています。

さて、以上みてきたように、日帝の食料の自給率はまったく低いわけですが、にもかかわらず、今後自給していくことができることを以下に示していきます。

今から一五年前の一九六五年には、穀物の自給率は、八三％もありました。その内訳は、米が約一〇〇％、小麦四〇％、大豆二八％、大麦や裸麦は一〇〇％以上という具合で、現在とは比べようもない高い自給率を示していたのです。しかし、この一九六五年前後を境にして、急速に自給率は低下していきます。では、それはなぜでしょうか？



日帝は、一九五〇年代の「朝鮮戦争特需」で敗戦から復活し、六〇年代は「ベトナム戦争特需」によって飛躍の好景をつけた。いわゆる経済の「高度成長」なる時代を作り、一九

六五年の「韓日条約」の締結によって、新植民地主義侵略を開始していきました。つまり、一九六五年は、朝鮮人民・ベトナム人民の血の犠牲の上に日帝本国の工業化の基盤を築き、経済の「高度成長」を達して、新植民地主義侵略に着手していった時なのです。工業重視政策がとられ、その結果、離農が促進され、農地が工業用地に転換され、工業製品輸出の見かえりとして、国内価格より安価な食料の輸入が増大していったのです。そして、日帝本国人総体が経済的に「豊か」になるにつれて、生活がぜい沢になり、そのため食事内容が、「近代食」といわれる畜産物にウェイトをおいたものに変っていったのです。

このように、食料の自給率の低下→輸入の増大は、日帝の再生と強大化、新植民地主義侵略の開始と拡大と軌を一にしているのです。このことから結論的に言うならば、食料の自給を可能にする方途は、日帝本国人総体が被植民地人民からの搾取と収奪の上に送っているぜい沢な生活を排除して畜産物中心の食事を止めること、すなわち日帝の新植民地主義侵略を止めさせていくことです。そして、このことは結局、日帝が日帝であるための生命線・根拠こそ新植民地主義侵略なのですから、日帝を撃

ち滅ぼすことこそが、食料の自給を可能にすることだと結論づけることができるのです。このことを前提的に踏まえた上で、自給の可能性を具体的に検討してみます。

一九七五年の時点で、日帝本国の耕地面積は、五五七万ヘクタールです。この農産物の輸入総量は約二四五〇万トンで、この量を生産するのに必要な面積は九四六万ヘクタールということになります。この内訳は、小麦二六四万ヘクタール、大麦・裸麦七三万ヘクタール、飼料穀物二五四万ヘクタール、畜産物（牛や馬が必要とする牧草地）一二六万ヘクタールです。大麦・裸麦も飼料用ですし、大豆も飼料用として使われますので、九四六万ヘクタールのうち半分以上は畜産物の飼料用として必要だというわけです。日帝には、現在の耕地面積の三倍もの土地はありませんから、現在のように畜産物を食べ続けようとする限り、畜産物を含めた食料の自給はまったく不可能です。

しかし、まだ三〇〇万ヘクタールの土地が開墾できるとされていますし、企業が所有している遊休地が七八万ヘクタール、休耕地が二六万ヘクタールあるといわれていますから、合計で四〇〇万ヘクタール余りは耕作可能地としてあることになります。つまり、畜産物の飼料の生

産のために耕地をとられなければ、穀物・豆類・野菜などはすべて自給可能であると言えるのです。

では、畜産物はまったく生産できないのか、という点を決してそうではありません。現在のように工場的システムによる大量生産はできませんが、かつてのように「庭先養鶏、残飯養豚」として、有機農業の一環に組み込んで生産していくことはできます。そして、現に各地で、有機農業の実践が続いているグループがあります。（が、問われていることは、有機農業の自己目的化ではなく、日帝を撃ち滅ぼしていく総力戦Ⅱ反日人民戦争の一翼として、有機農業を実践していくことだと思えます）。量的には現在よりもはるかに少なくなりますが、生産しようとするれば、棄置けではない畜産物を生産していくことは可能なのです。

さて次に、きつとGさんは、なぜ私が食料の自給にこだわるのか、しかも畜産物の生産が極度に少なくなることを承知の上で、穀物や野菜などの自給が可能になればいいというのか、と疑問を持っていると思いますので、以下にその理由を説明します。

私が食料の自給にこだわるのは、日本民族主義の対極の発想からです。食料が自給できなければ戦争に勝てな

いとか、食料の自給・備蓄が国力のパロメーターであるから増産せよ、といった戦前的大日本帝国の発想とはまったく異なっていますので、この点誤解しないようにして下さい。

私は、日帝が食料を輸入することは（輸入先はほとんどがUSA帝なのですが）、それだけ被植民地人民の食料を奪うことになる、と思うのです。だから、輸入をしないようにすべきだと考えているのです。

つまり、私たちは、人類の本源的共同体Ⅱ共産主義社会を再建することをめざして闘っていくのですが、そのためには一切の植民地収奪をやめなければならないし、そしてそれには農業を中心とした自給自足体制をつくらなければならないということです。

国連食糧農業機関（FAO）は、世界人口の三分の一にあたる一〇億人余りの人々が、現在、飢餓か栄養不良の状態にあると推定しています。余剰食料は、諸帝国とソ連などでのみ配分され、被植民地人民には飢餓が強制されているのです。諸帝国やソ連では、穀物はもちろん、穀物を飼料に使って肉・卵・チーズなどをたらふく食べているのに、被植民地人民は、主食の穀物すら十分には食べることができないのです。

ナイジェリア、インド、インドネシア、フィリピンなどでは、年間一人あたり九〇Kg〜一八〇Kg、一日にすると二三〇g〜四六〇gほどの穀物が手に入るだけですが、USA帝、ソ連などでは、年間一人あたり八〇〇Kgもの穀物が手に入ります。しかも、パンなどとして穀物を直接消費するのは九〇Kg〜一四〇Kgにすぎず、残りは、食肉・卵・牛乳として間接に消費されているのです。USA帝、ソ連などでは、ナイジェリアやインドなどの人民に比べて、実に五倍以上（日帝は三倍）もの穀物を消費しているのです。一方で、一〇億人以上もの飢えている人々がいるのに、彼らには穀物が配分されず、他方で食肉や卵やチーズを得るために家畜の飼料に回されているというのは、どう考えてもおかしい、と私は思うのです。そして、その世界的なひどい格差を、明らかに日帝は助長しているのです。なぜなら、世界の人口のわずかに二・五%の日帝が、貿易用穀物の実に一五%をも輸入してしまっているのですから。そして、この輸入穀物の半分以上が家畜の飼料に回されているのです。

被植民地人民に飢餓を強制するような日帝の穀物輸入は止めるべきであるし、そのためには、本来の自然の生態系に即した農業を復活させて、食料の自給をはからな

ければならない、と私は考えるのです。そして、また自給を実現していくために、現状のような「近代食」といわれる畜産物重視の食事ではなく、穀物・野菜などを中心とした食事に変えていかなくてはならない、と考えるのです。

しかし、こうしたことは、従来、被植民地人民の飢餓と犠牲の上に飽食三昧を続けてきた日帝本国人の大多数（下層労働者、貧農を除く中層・上層の日帝本国人）のあり様、思想を根本から変革することを要求しますから、日帝が日帝であり続けること、つまり新植民地主義侵略を続けていく限りは実現していくことはできないでしょう。まさに、日帝を撃ち滅ぼしていく長期の反日人民戦争の過程でこそ、真に実現していくことになるだろうと思います。

以上の説明で、Gさんは、自給の必要性ということを確認できるとし、果して畜産物を食べなくても、栄養失調などにならないのか、という疑問があると思いますので、この点について、次に書きます。

結論から言えば大丈夫だと思えます。先程書きましたが、現在は工場的に大量生産されている鶏や豚、そしてハマチやウナギの飼料とされたり、東南アジ

ア諸国などに缶詰めにされて輸出されていて、獲れたものが全部直接の形で私たちの口には入っていませんが、日本近海では、イワシやサバなどは自給に必要な量は十分に獲れることを確認する必要があります。近海ものの魚介類は、私たちに十分なカルシウムやタンパク質を提供してくれるでしょう（そのためにも、公害の発生源となつて海の生態系を破壊し、海洋生物を殺している原発・火発・製鉄工場・肥料工場・製紙工場などは、その操業を停止させる必要があるでしょう）。

また私は、人間を機械と同じように見なして、生命維持と活動に必要な熱量＝カロリーをはじき出すという、「近代栄養学」に疑問を持っています。なぜなら、私たちの身体は、機械のように単純なものではありませんから、カロリー計算によって必要な食料の量や質をはじき出されるのはおかしいと思うのです。そして、これは断言はできないのですが、草食の牛や馬がたくましく肉をつけ、乳を出すように、人間にもタンパク合成能力があるということを読んで、人間にもタンパク合成能力があるべければ、タンパク質が不足するとは思えないのです（インドの最下層の人々の中には、一生の間、毎日数回大豆のひき割りひとつかみをかみくだくという食生活を

している人々がいるそうですが、そしてそれほど短命ではないそうですが、「近代栄養学」では、なぜこのような食事で生きていけるのか説明はできないでしょう）。東洋に「身土不二」という思想があります。これは、身近な土地でとれるものを、そして、その季節にとれるものを食べることが自然にかなったことであり、健康に生きていくものであるという思想です。つまり、この思想は、季節に変わらなく年中食べることができる畜産物に依拠した思想ではなく、穀物・野菜・野草・果物などを食べていくというものです。私たちは、この「身土不二」にこそ依拠していくべきだと思うのですが、Gさんはどう思いますか？

寿命が伸びたと言われます。長生きできるようになったのは、現代文明の勝利だ、と。しかし、寿命が伸びたのは、乳幼児の死亡率が減少したからであって、成人や老人の病気が少なくなった訳ではありません。むしろ現代文明は、文明病といわれる薬害などを原因とした新たな病気を増大させています。そして、ガンや心臓病で苦しむ人々が増大しています。ガンや心臓病は、大気汚染・工業用化合物の被曝などの結果であるとともに、不自然・反自然な虚食の過食によって引き起こされていると思わ

れます。特に大きな影響を与えていると思われるのは、畜肉及び脂肪・卵・乳製品の過食です。そして、公害汚染物質が、食物連鎖の結果、畜産物に濃縮されているのです。

ですから、ガンや心臓病などの文明病を予防し、健康に生きていくためにも「近代食」＝畜産物を重視する食事を止め、穀物・野菜を中心にした食事にしていった方がいいと思うのです。玄米・菜食を実践している人たちは沢山いますし、この実践の中で病気を治し、健康を取り戻した人たちも多いようです。私たちは、畜産物を食べなければ栄養失調になるといった誤った考えを吹っ飛ばしていくべきなのです。

以上のような考えから私は、獄中という極めて制約された条件下ではありますが、畜産物抜ききの麦食（近海物の魚と野菜・果物は食べています）を行なっています。獄中では玄米も玄麦も食べられないし、野菜も質量ともに貧弱なのですが、こんな条件下でも私が元気に闘っていくことによって、食料の自給＝畜産物重視食の排除という主張を、単なる能書きに終らせないようにしようと思っています。私のこの実践は、いわゆる菜食主義から出発したのではなく、日帝の食料輸入が、被植民地人民

に飢餓を強制することになるから、それを止めさせていくこと、そしてそれは単に個人の生き方という領域にとどまる性質のものではなく、結局は日帝の新植民地主義侵略を止めさせ、日帝を撃ち滅していくことにつながっていくのですが、その思想的物質的根拠を検証していくことになるだろうと思っています。主食の穀物も十分に食べられずに飢えている一〇億人以上の人々が存在しているのに、飼料を輸入して、畜肉や卵やチーズなどを飽食しながら（では獄中の官食はどうでしょうか？獄中食は、日帝市民社会の近代食の水準と比較するならば質量とも粗末ですから、獄中者が畜産物を飽食していることにはならないと思います。しかし、被植民地の人民、とりわけ下層人民の食事と比較するならば、日帝本国の獄中食は「豊かな」食事であると思います。私が、ここで畜産物を飽食しているというのは、下層労働者、貧農を除く、中層・上層の日帝本国人ということですが、世界革命などを主張するのはウソになるだろう、ということなのです。

長くなりましたが、私の言わんとすることは受けとめてもらえたでしょうか？ 私たちは、食料を自給でき、のだし、それは日帝を撃滅していくことによって真に実

現するということを、あらためてGさんと確認して、ペンをおきたいと思います。
急に冷えこんできました。風邪をひかぬようにして下さい。健闘を！

追記：最後に、引用した数字の出典を示しておきます。

- ①『食糧問題の常識』（日本評論社）
- ②『工業社会の崩壊』（四季書房）
- ③『地球29日目の恐怖』（ダイヤモンド社）

黒川芳正詩集

ことば
言霊

（定価五〇〇円・〒二〇〇円）

ことば／カナリア／革命風使／海と少年／
旅人／隼人の呪い／帰ってきたジャッカル／
散文童話詩・詩人の死／「弱者」／子モグラ
モグラ／こぶし／ほか

発行所：原詩人叢書刊行委員会

東京都品川区大崎四―二―一四一四〇五
電話 〇三―四九二―三四九四

